名古屋女子大学　紀要　55（人・社）209～216　2009

アリス・ウォーカーの『グレンジ・コープランドの第三の人生』について

石川　和代

On Alice Walker's *The Third Life of Grange Copeland*

Kazuyo ISHIKAWA

I

The Third Life of Grange Copeland（1970）は、アメリカの黒人女性作家 であるAlice Walkerの第１作目の長編小説である。アメリカ南部ジョージア州の農村を舞台にして、貧しい黒人の小作人Copeland一家の三世代を描いたもので、時代は1920年代から1960年代に至る。物語は長期にわたるものであるが、あまり過去に遡ることなく時間の経過にそって語られており、様々な短いエピソードの積み重ねと、簡潔な描写によって描かれている。Copeland一家は白人の地主であるShipleyによって生活を支配されており、一家の主人であるGrangeは、白人への借金のために、息子のBrownfieldを学校へ行かせることも、妻のMargaretに衣服を買ってやることもできない。妻のMargaretはGrangeとの生活に耐えられなくなって、他の男と関係を持つようになり、白人の地主Shipleyの子供を生んでしまう。Grangeは南部での生活に絶望し、妻と息子と白人との間の子供を残して北部へ去って行き、Margaretは白人との子供を毒殺して、自分も自殺する。これがGrangeの第一の人生と言える。第二の人生とも言うべきものは、彼が自尊心を回復して立ち直るきっかけとなったニューヨークでの体験であり、Grangeの第三の人生は、南部に戻り自分の農場を持ち、孫娘のRuthの人生が息子のBrownfieldによって破壊されることがないように、Ruthを守ろうとする人生であると言える。息子のBrownfieldは父親の後を追って北部に向かって旅に出るが、途中で、かって父の情婦であったJosieの経営する旅館にたどりつき、そこでJosieの養女のMemと知り合って彼女に恋をする。彼はまもなくMemと結婚するが、最初は幸せであった二人の結婚生活は悲惨なものになって行く。Memは学校教育を受け、小学校の先生をしていた女性であったが、Brownfieldは妻が自分よりレベルが上であることに我慢できなくなり、学校をやめさせ、白人の家庭のメイドをさせる。また、Memに対して暴力を振るうようになる。Memが散弾銃を持って脅迫する場面もあるが、Brownfieldは、表面上は彼女に従う振りをしながら、彼女の中に弱さが戻ってくるのを待ち、子供達の目の前で妻を散弾銃で殺す。Memが殺された後、Grangeが残された孫娘のRuthを引き取って、彼女の保護者となるが、刑期を終えて出所したBrownfieldは、自分の娘であるRuthを取り戻そうとして訴訟を起こす。GrangeはRuthと二人で裁判所に行くが、彼女を守るためにBrownfieldを銃で撃ち殺し、警察に殺される道を選ぶのである。この小論では、小作人制度のもとで惨めな生活をしいられたGrange及びBrownfield

の人生について考えてみたい。

Ⅱ

Grangeの第一の人生は、主に息子のBrownfieldの視点から描かれているので、両親の生活を見ながら育ったBrownfieldの内面も描くことになったように思われる。Grangeと一緒に待っていた地主のトラックがやって来た時の場面は、次のように描かれている。

> Brownfield waited for the truck along with his father. His father never looked at him or acknowledged him in any way, except to lift his sack of cotton to the back of the truck when it arrived. Brownfield was afraid of his father's silence, and his fear reached its peak when the truck came. For when the truck came his father's face froze into an unnaturally bland mask, curious and unsettling to see. It was as if his father became a stone or a robot. A grim stillness settled over his eyes and he became an object, a cipher, something that moved in tense jerks if it moved at all.[1]

地主のトラックが到着した時のGrangeの反応をまだ子供であるBrownfieldが見たわけであるが、「まるで父親が石かロボットになったかのようであった」と述べている。この言葉から、黒人の小作人であるGrangeが白人の地主に対して絶対的に服従せねばならないみじめな存在であることが感じられる。Brownfieldは、この時点では父親をこのような状態にした原因が何であったのか理解していないが、これに続く箇所では、その原因が父親とは肌の色も含めて全く異なる男であったことを理解する。

> But after watching the loading of the truck for several weeks he realized it was the man who drove the truck who caused his father to don a mask that was more impenetrable than his usual silence. Brownfield looked closely at the man and made a startling discovery; the man was a man, but entirely different from his own father. When he noticed this difference, one of odor and sound and movement and laughter, as well as of color, he wondered how he had not seen it before.（8）

ここでもまだBrownfieldは白人の地主が自分たちにとってどのような存在かは理解しておらず、"Brownfield's immediate horrified reaction to the man who froze his father was that the man had the smooth brownish hair of an animal."（9）から分かるように、父親を動けなくさせたのは、動物のような滑らかで茶色い髪をした男であったという反応を持つだけである。それ故、地主のShipleyから"You're Grange Copeland's boy, ain't you?"（9）と言われた時、Brownfieldは"Uh huh,"（9）と答え、その場にいた大人から"Say 'Yessir' to Mr. Shipley,"（9）と言われ、まだ何も言わないうちに顔をあげて父親の顔をじっと見る。その時のGrangeの表情については、"The mask was as tight and still as if his father had coated himself with wax. And Brownfield smelled for the first time an odor of sweat, fear and something indefinite."（9）とあり、Grangeが無表情であり、地主に対する恐怖心を抱いていることが分かる。まだ子供であっても、ここではBrownfieldも、地主に対しては丁寧な口調で返事をしなくてはならないことを知ったと思われるし、白人の地主と黒人の小作人の関係を知り、Grangeの表情と態度から、彼自身もまた白人に対する恐怖心を抱くようになると考えられる。

ここで、第一の人生におけるGrangeの生活について考えてみたい。先に述べたように、小作人のGrangeは白人の地主への借金があり、息子のBrownfieldを学校にやることもできず、妻に衣服を買ってやることもできない。いくら働いても、一家の主人として家族のために十分なことをしてやることができないことは、Grangeにとって耐え難いことである。彼は土曜日になると町へ出かけ、情婦のJosieの所へ行き、酒に酔って帰宅し、妻のMargaretと息子のBrownfieldを殺すと言って脅し、銃を発砲する。

> Late Saturday night Grange would come home lurching drunk, threatening to kill his wife and Brownfield, stumbling and shooting off his shotgun. He threatened Margaret and she ran and hid in the woods with Brownfield huddled at her feet. Then Grange would roll out the door and into the yard, crying like a child in big wrenching sobs and rubbing his whole head in the dirt. He would lie there until Sunday morning, when the chickens pecked around him, and the dog sniffed at him and neither his wife nor Brownfield went near him.（12）

中庭に入って子供のように泣きながら土に頭をこすりつけるGrangeは、男として一家をしっかりと養うことのできない自分の無力さを嘆くと言える。W. Lawrence Hogueは、男であることの定義について次のように述べている。

> On the one hand, ***The Third Life*** reproduces an established definition of manhood–taking care of self and family–that becomes the model for measuring the worth and value of the Afro-American male. On the other hand, the text places that definition of manhood in an Afro-American constellation where it has no chance to materialize.[2]

黒人の小作人のGrangeが十分に自分と家族の面倒を見ることができず、その無力さを嘆くことから考えて、この指摘は納得がいくものであると言える。

無力なGrangeは住んでいる家の修理をすることもできないが、家を眺めるGrangeについて描いた次のような箇所がある。

> Grange stood with an arm across the small of his back, soldier fashion, and with the other hand made gestures toward this and that of the house, as if pointing out necessary repairs. There were very many . . . . While his son watched, Grange lifted his shoulders and let them fall. Brownfield knew this movement well; it was the fatal shrug. It meant that his father saw nothing about the house that he could change and would therefore give up gesturing about it and he would never again think about repairing it.（13-14）

ここで述べられるGrangeの“the fatal shrug”は、たとえ住んでいる家に修理すべき部分がたくさんあっても、自分ではどうすることもできない無力さを表す仕草である。

このように無力な夫に対して、妻のMargaretは常に従順であるが、そのような彼女について、息子のBrownfieldは次のように思う。

> Brownfield frowned. His mother agreed with his father whenever possible. And though he was only ten Brownfield wondered about this. He thought his mother was like their dog in some ways. She didn't have a thing to say that did not in some way show her submission to his father.（５）

Brownfieldは、父親に対して母親がまるで犬のように従順であると感じるのである。彼はまた、母親が父親によって売り飛ばされるのを恐れていたとも考える。

> Maybe his mother was as scared of Grange as he was, terrified by Grange's tense

composure. Perhaps she was afraid he would sell her anyway, whether she wanted to be sold or not. That could be why she jumped to please him. (11)

このように夫に対して従順な母親の姿を見て育ったBrownfieldは、後に自分が結婚した時に、妻に対して従順さを求めることになる。

夫に対して従順であったMargaretは、Grangeとの生活に耐えられなくなって、何人かの男と関係を持ち、白人の地主Shipleyの子供を生む。それでもMargaretは“She had sincerely regretted the baby. And now, humbly respecting her husband's feelings, she ignored it.”(20)という部分から分かるように、白人の子供を生んだことを後悔し、夫のGrangeの気持を尊重して、その子供の世話をしようとしない。Margaretは、他の男と関係を持つようになっても、最後までGrangeに対する愛情は持っていたのであろう。この後、Grangeは南部の生活に絶望し、息子のBrownfieldに手で触れることもなく家を出て北部へ向かう。Grangeが家を出てから３週間めの終りに、Margaretは怒ることもなく、“Well. He's gone,”(21) と言い、次の週には、白人との子供を毒殺し、自殺するのであるが、死んでいるMargaretをBrownfieldが見つけた時、“She was curled up in a lonely sort of way, away from her child, as if she had spent the last moments on her knees.”(21)とあるように、彼女は最後に跪く姿勢をしていたと思われる。それは、夫のGrangeに対する償いの気持の表れであったのかもしれない。

父親が家を出て、母親が自殺し、一人残されたBrownfieldは、母親の葬式にやってきた地主のShipleyから、彼の農場で働くように言われるが、父親の後を追って北部に向かう。ここから物語はBrownfieldの物語に入り、Grangeの第二の人生とも言えるニューヨークでの体験より前に、Brownfieldの生活について描かれる。彼は北部に向かって旅に出るものの、先に述べたように、途中で、かって父の情婦であったJosieの経営する旅館にたどりつき、Josieの養女のMemと知り合って彼女に恋をする。彼はまもなくMemと結婚し、白人の農場で働き始める。

Memは学校教育を受け、小学校の先生をしていた女性であり、明るく優しい女性として描かれている。

For Mem was the kind of woman who sang while she cooked breakfast in the morning and sang when getting ready for bed at night. And sang when she nursed her babies, and sang to him when he crawled in weariness and dejection into the warm life-giving circle of her breast. He did not care what anybody thought about it, but she was so good to him, so much what he needed, that her body became his shrine . . . . (49)

Memは、朝食の用意をする時も、子供に乳をやる時も、疲れ果てた夫のBrownfieldが彼女の体を求める時も、どんな時も歌を歌う明るさを持っており、Brownfieldがとても必要とする女性であるが、彼は、後になって、妻の方が自分より教育がありレベルが上であることに我慢できなくなる。

白人の農場で働くBrownfieldが、自分の５歳の長女に綿花畑で虫よけの消毒の仕事をさせる場面があるが、それは次のようなものである。

She breathed with difficulty through the deadly smell. At the end of the day she trembled and vomited and looked beaten down like a tiny, asthmatic old lady; but she did not complain to her father, as afraid of him as she was of the white boss who occasionally deigned to drive by with friends to watch the lone little pickaninny, so tired she barely saw them, poisoning his cotton.

> That pickaninny was Brownfield's oldest child . . . . That was the year he first saw how his own life was becoming a repetition of his father's. He could not save his children from slavery; they did not even belong to him. (54)

この場面で、Brownfieldは、白人の地主のための仕事をして疲れ果てた自分の５歳の子供の姿を見て、自分の人生が父親の人生の繰り返しになっていることを、初めて理解するのである。この時代には、奴隷制度はすでに廃止されているが、南部の田舎では、黒人は白人の地主のもとで小作人として働くことが多く、“His indebtedness depressed him. Year after year the amount he owed continued to climb.”(54)という箇所からも分かるように、借金は増える一方であり、貧しさから抜け出すことは困難な状況であったと考えられる。Brownfieldは、“He felt himself destined to become no more than overseer, on the white man's plantation, of his own children.”(54)とあるように、白人の農園で自分の子供の監督をする程度のことしかできないと感じるのである。南部におけるこのような黒人の生活を考えると、Robert James Butlerの“In this novel the South is a place of terrible entrapment which destroys family life and enslaves blacks to an endless cycle of physical and spiritual poverty.”[3] という指摘は的を得たものであると言えるし、Donna Haisty Winchellの“Brownfield is never able to assume responsibility for himself and his family in a way that will free them from the cycle of despair into which he was born . . . .”[4] という意見は、Brownfieldの状況を的確に把握したものであると言うことができる。

Brownfieldは、この後、妻のMemに学校の先生をやめさせ、白人の家庭でメイドとして働かせるようになる。貧しい小作人の家庭に生まれ、学校教育も受けておらず、成功することができないと感じ、誇りを押しつぶされたBrownfieldは、妻を自分と同じレベルに下げるために先生の仕事をやめさせて、白人の家庭のメイドをさせるのであり、“It was his rage at himself, and his life and his world that made him beat her for an imaginary attaraction she aroused in other men . . . . ”(55)とあるように、貧しさから抜けだせない自分自身、自分の生活、自分の世界に対する怒りから、ありもしないことを想像し、妻を責めて殴るのである。毎週、土曜日の夜になると、彼は“pin the blame for his failure on her by imprinting it on her face”(55)しようとして妻を殴るが、その結果として彼女は必然的に“a haggard automatous witch”(55)になっていく。彼女のレベルが下がり、彼女が醜くなれば、彼は彼女を殴り易いとも言える。

夫のBrownfieldから暴力を振るわれても従順に振る舞うMemも、子供達の将来を考えて、子供達には奴隷時代のような白人の土地にある小屋で生活させたくない、世間並みの学校教育を受けさせたいと考える。彼女は町できちんとした設備のある家を借りて、仕事も見つけ、町での暮らしを始めようと努力する。家が見つかり、彼女が家を借りる契約書にサインしたことをBrownfieldに話すと、彼は、“I'm a ***man***, and I don't intend working in ***no***body's damn factory.”(87)と、町の工場で働くつもりがないことを告げる。Memは自分が働いてその収入で家賃を払い、町で生活しようと考えて、仕事を見つける。ある土曜日に酔って帰宅したBrownfieldは別の地主の土地へ家族全員で引っ越すことをMemに命令するが、Memにそのつもりがないことを知ると、Memをひどく殴ってから寝てしまう。翌日、Brownfieldが目を覚ますと、彼は裸にされており、散弾銃をもったMemがその銃口を彼に向け、“Don't you move a inch,”(92)と脅迫する。彼女がこのような手段をとるのは、町の家に住むことをBrownfieldに認めさせるためである。彼女が10項目の要求を突きつけると、とりあえず、彼はMemに従

う振りをして町の家で暮らすようになるが、彼は彼女を弱らせようと考えて妊娠させる。その結果、彼女は外で仕事を持つことができなくなるが、Brownfieldは家賃を支払うこともしない。そして、一家は再び小作人としての惨めな生活に戻るのである。彼女は、“I'm going to git well again, and git work again, and when I do I'm going to leave you.”(107)と言うが、その言葉通り、Memは元気になり、再び町で働くようになる。そしてある日、Memが仕事から帰ってきた時、Beownfieldは、子供達の見ている前で、彼女を散弾銃で撃ち殺す。当然、彼は刑務所に入ることになり、子供達は両親と暮らすことができなくなる。Brownfieldは妻を殺害するという大きな罪を犯したのであるが、“Brownfield had thought uncomfortably but not regretfully of what he had done.”(161)という箇所から、彼には妻を殺したことに対する罪悪感が全くないことが分かる。

一番幼い孫娘のRuthを祖父のGrangeが育てることになるが、その第三の人生に先立って、Grangeの第二の人生とも言える、ニューヨークでの体験について、ここで考えてみたい。Grangeが北部へ向かったのは、北部へ行けば南部のように白人に支配されないと考えたからであろうと思われるが、“When he had gone through Baker County on his way North he was a baby in his knowledge of the world.”(140)とあるように、南部で小作人として暮らした経験しかないため、彼の世間に対する知識は乏しいものであり、“ He had found that wherever he went whites were in control; they ruled New York as they did Georgia; Harlem as they did Poontang Street.”(140)から分かるように、実際にニューヨークへ行ってみて、彼はどこでも白人が黒人を支配していることを知る。さらに、彼は次のように感じる。

> He was, perhaps, no longer regarded as merely a“thing”; what was even more cruel to him was that to the people he met and passed daily he was not even in existence! The South had made him miserable, with nerve endings raw from continual surveillance from contemptuous eyes, but they ***knew he was there***. (144-145)

北部では、黒人が物とみなされることはないものの、白人からその存在すら認められないのに対して、南部では、絶えず軽蔑を示す監視にさらされて神経がすり減ることはあっても、黒人の存在は認められるということを実感するのである。

そんな時、ニューヨークの公園で、Grangeは身重の白人女性が池に落ちるのを見て助けようとするが、その時彼は、次のようなことを思い出す。

> In a split second he recalled how he had laughed when his grandfather admitted helping white“masters”and“mistresses”out of burning houses. Now he realized that to save and preserve life was an instinct, no matter whose life you were trying to save. (152)

Grangeは、このように、誰の生命であれ、それを救うことは本能なんだということを理解する。そして彼は白人女性に手を差し伸べるが、“She reached up and out with a small white hand that grabbed his hand but let go whe she felt it was ***his*** hand.”(152)から分かるように、その白人女性は、一度は彼の手をつかんだものの、それが彼のの手だと分かったとたんに、放してしまう。その時、Grangeは自分のよごれた茶色い手をじっと眺め、それ以上彼女を助けようとはせず、急いでその場を立ち去り、女性は池に沈んで行くが、“She called him ‘nigger’ with her last disgusted breath.”(152)とあるように、彼女は息絶える時に彼のことを「黒んぼ」と呼ぶ。黒人に対する差別意識のために、この白人女性は、黒人に助けられることを拒否して死んでいったと言える。

Grangeはこの女性のことを忘れることができず、心がとがめられる思いがするが、この女性を見殺しにしたことが、不思議にも彼を解放することになる。

> The death of the woman was simple murder, he thought, and soul condemning; but in a strange way, a bizarre way, it liberated him. He felt in some way repaid for his own unfortunate life. It was the taking of that white woman's life–and the denying of the life of her child–the taking of her life, not the taking of her money, that forced him to want to try to live again. He believed that, against his will, he had stumbled on the necessary act that black men must commit to regain, or to manufacture their manhood, their self-respect. They must kill their oppressors.（153）

Grangeを、再び生きたいという気持ちにさせたのは、白人女性の生命を奪ったことであり、彼は自分の意志に反して、白人の生命を奪うことが、黒人の男が自分の男らしさ、自尊心を回復するために必要なことであり、黒人はその抑圧者を殺さなくてはならないと信じることになる。白人から差別され、抑圧されてきた黒人として、Grangeがこのように感じたのも無理はないと思われる。この後、Grangeは、多くのイタリア人、ポーランド人、ユダヤ人と喧嘩するが、それは、Grangeにとって、彼らはみな白人であり、彼は、彼らの文化の違いなど理解していなかったからである。

まもなくGrangeは、全ての白人と戦うことは不可能であることを理解し、一人一人の人間が、可能な最良の方法で自分自身を解放しなくてはならないと考える。

> But soon he realized he could not fight all the whites he met. Nor was he interested in it any longer. Each man would have to free himself, he thought, and the best way he could. For the time being, he would withdraw completely from them, find a sanctuary, make a life that need not acknowledge them, and be always prepared, with his life, to defend it, to protect it, to keep it from whites, inviolate.（155）

このような思いから、Grangeは南部に戻り、かっての情婦Josieと結婚し、自分の持っていたお金と、Josieを説得しての彼女の店を売って得た資金で、自分の農場を持つ。そして、BrownfieldがMemを殺して刑務所に入った後で、Grangeは孫娘のRuthをこの農場で育てることとなる。

Brownfieldは、刑務所を訪れたJosieの話から、GrangeがRuthを育てていることを知る。刑期を終えて出所したBrownfieldは、自分の娘のRuthをGrangeから取り戻そうと考えるが、それはRuthを愛しているからではなく、彼がRuthに向かって“You belongs to me, just like my chickens or my hogs . . . . Tell that to your prescious grandpa. Tell him he can't keep you; and before I let him I'll see you both in hell!”(220)と言うことから分かるように、彼がRuthを自分の単なる所有物と考えているからにほかならない。そのようなBrownfieldにRuthを渡せば、彼女の人生が破壊されることは明らかである。それゆえ、BrownfieldがRuthを取り戻そうとして訴訟を起こした時、Ruthと二人で裁判所に出かけたGrangeは、Ruthの将来を守るためにBrownfieldを銃で撃ち殺し、自ら警察に殺される道を選ぶのであり、Donna Haisty Winchellの、“The one enemy that Grange can neither convert nor forgive is not ultimately, in spite of his avowed hatred for the entire white world, the white man, but his son, Brownfield.”[5] という指摘は納得できるものである。

GrangeとBrownfieldの人生について考えてみると、二人とも白人の地主に絶対的に服従せざるを得ない黒人の小作人として、借金がかさみ、家族を十分に養うことができず、一家の主

人としての誇りを押しつぶされたと思われる。その意味では二人は同じ状況を経験したと言えるが、息子のBrownfieldが妻の殺害に対する罪悪感も感じない人間になったのに対して、父親のGrangeは、第一の人生において妻を自殺に追い込むようなことになったものの、第三の人生においては、孫娘のRuthを愛情を持って育て、守ったのである。第二の人生を通して自尊心を回復したGrangeが、第三の人生において、しばらくではあるが人間らしい生活をすることができたことは、読者にとって救いである。

注

1　Alice Walker, *The Third Life of Grange Copeland*（London: Women's Press, 1991）, 8．以後、この作品からの引用 はこの版によるものとし、引用箇所の後の括弧内に、その頁を記す。

2　W. Lawrence Hogue, "History, the Feminist Discourse, and Alice Walker's *The Third Life of Grange Copeland*," *MELUS*, 12（1985）, 56.

3　Robert James Butler, "Making a Way Out of No Way: The Open Journey in Alice Walker's *The Third Life of Grange Copeland*," *Black American Literature Forum*, 22（1988）, 70.

4　Donna Haisty Winchell, *Alice Walker*（New York: Twayne Publishers, 1992）, 47.

5　Donna Haisty Winchell, 52.